

はねのうえ くものうえ

夏休み、って言うんだよな、いまのこと。

ホットケーキ食えるところが閉まってからもう1ヶ月。手紙運びの仕事もなし、しかたないんで店の前を掃き掃除、か。そりゃ、なんにもしないよりオレには合ってるけど、頭の上の太陽さえもつと弱けりやなあ

ピーー ピーー

ああ、店の前の池の上、鳥が飛んでるよ。気持ちよさそうだなあ。

あ、ボートの端に乗った。そのまま、ボートといっしょに揺れている。そうそう、あれもわりと気持ちいいんだ。水の上に降りるのが一番涼しいけど、水がきれいだと、あれでも結構 ん!?

バシヤッ!

バタタタタッ

!!

あゝあ。ほかのボートの水しぶきで驚いて行っちゃったよ。ったく、ちよつとは鳥のことも考えて欲しいよなあ こんなところで言っても、聞こえやしないだろっけどさ。

いや、近くでも聞こえねえか。この暑いのに、ボートで二人乗りだもんな。よくベタバタしてられるよなあ

「こら、シロップ!」

すぐ後ろからキンキン声。オレが思わずため息つきながら振り向いたら、目の前いっぱい暑苦しい髪が広がった。

「なにサボってんのよ。ナッツハウスの営業、まだ終わってないんですからね!」

ほらほらほら、ナッツさまのお手伝いよ。働く働くっ!!」

バケツをオレに押し付けながら、くるみがまだぶつぶつ言ってる。けど、オレの目はそれより上を見ただ。

青い空に、白い雲。

「にしても、暑つついよなあ」

「こんくちちわあ〜」

ナツツハウスのドアがキィッと開いて、いつもの声がひとつ聞こえてきた。

「りんか。早いな」

レジにいたナツツの声。店の奥で小物みかいてたオレは、棚に戻してから首だけドアの方向いた。

ゆっくり入ってきたのは、短いそでのシャツに短パン姿のりん。暑いときは、こいつみたいのがいいんだよな。髪も短いから、見ても涼しそうで。まあ、

オレやココたちは変身していると服あんま関係ねえから、よけいにそう見えるのかもしれないけどさ。

くるみだけは、変身してくせに何度も服とつ変えてたっけ。『女の子のお約束です』とか言ってたけど、結局いま着てんのが体じゅうピラピラした服で、あんま涼しそうに見えねえ。まあ、モトは変えようがない、ってことが。

「ただ、りんの動き、なんか変だな？　なんか、ふらふらして」

「早くな〜い。ちよっと、お、そ、すぎ」

「って、ぽ〜とした声といっしょに、ふら〜と。」

「ふら〜と、と？　ちよっと待てえ〜っ！」

「てやっ〜！」

オレはレジの前に駆け込んでいって、なんとか倒れる前に肩と頭を受け止めた。けど、

「く〜っ！　重いい〜っっ〜！」

「ぱかんっ〜！」

5 はねのうえ くものうえ

「ッてエな、頭になんか当たってきて、思わずりん落とすところだったじゃねえか！」

「ん？目の前につぎつたい、ピラピラの服？」

「なにしゃがんだよ、くるみ!!」

頭を上げた先には、くるみの顔じゃなくておたまがあつた。

「『なにしゃがんだ』じゃないわよ。乙女に向かつて『重い』はないでしょーが。それも、本っ当に重そうな声で!!」

「こいつ、ひとをこんなもんで殴りやがってっ！」

「重いもんは重いんだ！うそだと思つたら持つてみやがれ！」

「あ、こいつ、言つたオレを、ふんっ、て目で見てやがる。」

「そんなの、鍛え方が足りないだけよ。ココさまやナツさまなら、羽根でも受けるようにぶんわり支えられるはずだわ？それを、あんたが無理に割り込んでくるか」

「その辺にしとけ。りんが起きる」

!?

「ナツツの声で思わず手に力が入って、オレはりんの肩を支えなおした。顔を覗き込んでみたけど、口元と胸はいっしょにゆっくり動いてる。ふう。やれやれ。」

「だいたい、なんでこいつ倒れてるんだ？前にもなかつたか、こんなこと」

「くち動かしながら、オレはナツツハウスの中を見回してた。ああ、ちくしょう！1階じゃ寝かせる場所もないじゃんか!!」

「たぶん、前と理由は同じだ」

「結婚式にりんの作つたアクセサリー付けた人がね、気に入っちゃって、パーティ用にもうひとつ欲しい、って言ってくれたらしいのよ。きょう届けるから、がんばる、って聞いているけど」

「オレの腕から力が抜けかけた。さすがに落とさないけど、」

「なんだ、またかよ」
 「いっぺん落としてもいいんじゃないかって思うよな、こいつは。」

「なんでも一生懸命なのよ。りんは」
 そばに来たくるみが、りんの髪を直してやってる。
 「んなことはオレだつてわかつてる。けどなあ、
 「だけど、もう少しよう 考えてできねえもんかなあ？」

「思わず、ため息も出るつてもんだよ。」

「ん？ なんか、空気がへんだぞ？」

「なに笑つてんだよ!？」

「だつて、シロップに言われても、ねえ」

「まあ、説得力はないな」

「つたく、ふたりして好き勝手言いやがつて！」

「でもまあ、出上がりはしたみたいだな」

「ナツツが、オレの手元を見る いやそうじゃない。オレが支えてる、りんの手元を見るんだ。」

「いろんな色にきらきら光ってるもの。ああ、これが作つてたつていうアクセサリか。」

「じゃ、はい」

「いきなり、そのアクセサリが、オレの目の前まで上がってきた。」

「シロップ、よろしくね」

「くるみのヤツが、りんの手ごとオレの前に持つてきてんだ。」

「なんだ、こりゃ？」

「なんだ、じゃないでしょ。お仕事よ、お仕事」

??

「りんが倒れちゃつたんだもの。あんたが渡しに行くくしかないでしょーが。電車で行かなきゃとか言つてたし、それ使つて今日の夜なんだから」

「知るか、そんなことっ!!」

「つて言おうとした瞬間、目に入つちまった。りんの傷だらけの手。擦つたり切つたり刺したりしたあと。」

「つたく、しょうがねえなあ せいっ!」

7 はねのうえ くものうえ

ぼんっ！

「くっ！」

「きゃっ！」

いつもの白い煙が引いて、目の前に見える景色が少し高くなった。やっぱり、このくらいからのが一番ながめがいいな。

「うわっ、ど、どうしたんだ!？」

店の奥からココの声も聞こえる。まったく、そんなに大げさなことやってないって。

「シロップ！ 店の中で変身するんじゃないわよ。物が壊れるじゃない!!」

ホント、うるさいヤツだなあ、そんなくらい考えるに決まってるだろうが。それに、

「どーせオレは鍛えてないロブ。だからこの姿じゃないと よっ、ロブ」

「わーっ！ くら、ばかシロップ！ りんを食べるなーっ!!」

だれが食べるか！ あー、もう、かまうのやめだ。

それより、りんだよな。お腹ごとくわえて、あんなま揺らさないように よいっ

すたん、って音と一緒に、背中が重くなる。よし、これでひと安心だな。

さて、次は、と。

「うん？ なにしてんのよ」

はあ ったく、カンの悪いヤツだなあ。こっちは店壊さないように片羽根だけ開いてるってのに。

「とっとと乗れロブ。オレだけ行ったって、相手に説明なんてできないんだか」

言ってる途中で、背中の中の重みはずれた。

オレはあわてて羽根を少し上げた。重みはまだ真ん中外れたくらい。ふう、壁にぶつからないで済んだみたいだ。

ん？ なんだこの、ふふふ、って 笑い声？ 「仕方ないわねえ。乗ってあげるわよ、あたしも」

羽根をよじ登ってくるくるみの顔、背中に消える
まですつとニヤニヤしてた。

ちえっ！

「よおし、いいぞナッツ」

店の扉を大きく開けたココが、こつちに向かつて
声をかけてきた。おもてに人なし、だな。あとは

見上げると、くるみがシロップの背中から顔を出
して、ココに手を振っていた。俺はそれを素早く押
し込んで、

「扉はそんなに高くない。引つ込めないと、頭をぶ
つけるぞ」

頬を膨らませたくるみの顔に笑いそうになるのを
抑えながら背中のはぼるを直すと、俺はもう一度扉の
方を見た。

床に障害物、なし。

「よし。頼む、シロップ」

「それじゃ、いくロプー！」

シロップの体が一瞬沈んで、すぐさま前に進みだ
した。羽根をとじたまま、大きな足で床を蹴って、前
に、前に　ん？

突進してゆく扉の脇で、ココが慌ててるな。店の
外と中を交互に見ながら、手を交差している。まる
で×印　しまった！

「シロップ！止ま　」

言いかけた言葉を、俺は飲み込んだ。もう、遅い。
大きく息を吸って、小さくなるシロップの背中を
見つめていると、扉を抜けた瞬間、小さな悲鳴がふ
たつ。

女の子ふたり、か。

俺は扉に駆け寄った。

外に出る寸前に大きく呼吸して、軽く汗を拭いて。

9 はねのうえ くものうえ

この1年で少しだけできるようになった笑顔を作
て よし。

「いらっしゃいませ」

扉を出てすぐ、外でへたり込んでいる女の子たち
に、俺は声をかけた。

「え？」

声が重なったまま、ふたつの顔がこっちを向いた。
ふたりの手は、シロツプの方を指差したままだ。俺
はその手を取って、起き上がらせた。

「ここまででは上出来だ。ふたりともシロツプじゃな
く、俺の顔を見ている。だが、考えろ、ナツツ。ど
うやって誤魔化す？ まだシロツプが飛んでゆくの
が見えているんだ。夢や幻じゃ済まない」

「宅配サービスなんですよ」

笑顔が崩れかけていた俺の背中から、のん気な声
が響いた。

「まだテスト中だけだね」

言いながらココが脇を通り過ぎて、女の子たちの
ほこりを払ってやっている。

その顔が、ふっと上がった。

「なあ、ナツツ。やつぱり、お客さんが来るときは、
やめたほうがいいかなあ？」

あっけらかん、とした声の調子に、目の前のふた
りの表情が啞然となる。なるほど。

「そうだな。今度からは、開店前だけにしようか」
言った瞬間、俺とココは同時に笑い出した。目線
でタイミング合わせて、まったく同時に。

女の子たちも、笑ってる俺たちを交互に見てくす
くす笑い始めた。

「店長さん、冗談言えたんだー」

「ホントは、なんだつたんですかー？」

「たまに遊びに来るんだよ。湖に住んでる鳥なんだ
けど」

女の子たちを案内するココの姿が、店の中に消え

るのを待って、俺はまた外に目を移した。

「適材適所、か」

湖のはるか上、青い青い空に、小さくなったシロツプの姿が溶けていく。

その下では、小さな鳥が水辺で遊んでいる。まるで、なにもなかったかのように――

「ナツツー、ちょっと来てくれー」

静かな湖の風景に背を向けると、いつもの店の風景が飛び込んでくる。

俺はまた一呼吸して、顔を作り直すと、ナツツハウスの扉に手をかけた。

「やれやれ。大人は大変だな」

羽根を思いつき開いて羽ばたくと、足もとの湖が小さくなっていく。日ざしは体と羽根の両方に当

たって暑いけど、風が頭を冷やして

「ねえシロツプ」

冷やして ぐれない。ここの暑い日ってのは、風まで暑いんだよね。

「いま、女の子の声しなかった？ ちょっと、シロツプ？」

パルミエ王国なら、いつでももちょうどよかったんだよね。寒くもないし、暑くても飛べば涼しいし

バンツツ!!

痛っ てえ〜っ!!

「いきなり背中叩くなロフ！ 落ちたらどつする口ブ!？」

咳き込みそうなのをなんとか堪^こえて背中を見たら、くるみのやつが立ってた。腕組んで、こっちをにらんでやがる。

「あたしを無視するからでしょう？ それよりシロツプ。さっきの女の子の声、悲鳴じゃなかった？」

ああ、なんだ。あれか。

「飛び上がるとき、近くにいたロブ」

頭を前に戻す途中で、また背中が痛くなった。

「ちょっと、大変じゃない！なにやって」

背中ドンドン叩きやがって ったく！

「だいじょうぶロブ。みんなナッツハウスに入ってたロブ。きつとココたちがごまかしてくれたロブ」

「あつたり前でしょ？・ココさまだつたら、そのくらいチョチョイ、で済ませてしまわれるわ。

でも、ココさまに余計な手間をかけさせるなんて、お世話役として許しがたいわね！」

よく言つぜ。『お世話役』のあとに『見習い』がくくせ」。

って、のどまで出かかったけど、やめた。そんなことやってる場合じゃないんだ。な、メルポ。

すーっ、すーっ

静かな寝息が、小さな部屋の中を満たしてるわ。

シロツプの顔が離れてから、りんの寝顔をしばらく見てたけど、よく寝てる。起きる様子はないわね。いいわ。届け先に着くまで寝かせてあげましょ。

すーっ、すーっ

それにしても、よく寝てるわ。着いても寝て

たらどうしよう？ あたしじゃ相手の顔はわからないし、だいたいシロツプだって、この姿で玄関先に降りるわけにはいかないわよね。

ん？ なんか、引っかかる感じがするわ？

「シロツプ、いまどのへん？ あとどのくらいでつくの？」

なんか引っかかるけど、とりあえず時間だけは確認しとかなくちゃね。なんたってあたしは、お世話

役なんだから。

「知るかロブ」

でも、返ってきた言葉に、思わずぽかんと口開けちゃったわ。3秒くらい。

「はあ!? なに言ってるのよ。あんた仕事もちゃんとしてできなく」

「いきなり倒れたロブ。場所なんて、聞く暇なかったロブ」

なら、なーんで乗せて飛んだりしたのよ

って、口に出す瞬間にとめた。そっか、倒れちゃったからとりあえず乗せたのよね。

「まったく、考えなしなんだから、まあ」

あたしは、りんに近いっていった。ホント、よく寝てるわね。それじゃ、ええと

「ん?」

パンツのポケットにはない、か。じゃ、胸かな?

「ロブツ!!? な、なにしてるロブ!!」
あん?

手を止めて見上げたら、シロツプの大きな顔がこっち見てた。なに?

「そ、そんなヘンなことにシロツプの背中を使うなロブツツ!!」

ヘンなこと? ああ。まったく、まあ!

「変なこと考えてんじゃないの! あたしはねえ、届け先の地図を見ようとしてただけよ ほら、あった」

「なんだ。びっくりさせんな ロブツ!!」

「ごっ、って大きな音が、一瞬でわたしたちの上を通り過ぎていった。」

「飛行機、ね」

見上げるあたしの足もとが、なんだかふわっとしてきた。

「び、びっくりしたロブ」

なーるほど、羽毛が逆立った。ってわけね。

「まあ、いいわ。それより、地図は見つかったし、場所も書いてある。これなら」

「無理ロブ」

ん？なに、このぶすつとした声。

「なんで無理なのよ。飛んでるんだから、真上から見れるのよ？地図と同じじゃない」

「そう思っただったら、下を覗いてみるロブ」

「まだなんかぶつぶつ言ってる。いいわ、場所くらい、あたしが見つけて え？」

「色の、かたまり」

「乗ってるかこの縁から目まで出して下を見た瞬間、

あたしの頭に浮かんだのが、それだった。

灰色、茶色、緑色、薄い水色に赤っぽい色。町も、

市も、県の境目だって描いてない

「ばかーっ！どーしてこんな高いとこ飛んでんのよっつ！！」

「

思わず大声になっちゃって、りんの方見てみたけど

「寝てるわね。ぶっ。」

「場所知ってるりんだって、こんな上からじゃ探せないわよ」

「地図と下を何度か見比べてみたけど、見るたびに

頭が痛くなるわ。せめて、もっと低ければ

「でも、これより低くは飛べないロブ。高いのとか飛んでくるとか、いるんなのにぶつかっちゃうロブ」

「なんかムカつくわ。なに偉そうに解説してんのよ、こいつはっ！」

「じゃ、どーやって行くつもりだったの え？」

「メルー！」

「また足もと叩こうとしたあたしの前に、りんの影から何か飛び出してきた。アクセサリーをくわえた、

メルボ？

メルボ？

「そのアクセサリーロブ。思いのこもったものなら、メルボが思いの場所まで案内してくれるロブ」

「なんだ。じゃあ、簡単じゃない。だったら最初から

そう あれ？ヘンね。メルボが首かしげてる？」

「それが、ダメロブ。さっきからメルボががんばってるロブが、うまくいかないロブ」

「シロップの大きなため息。前を向いてるはずなのに、はつきり聞こえちゃってる。もう、メルボがしゅ

んとしてるじゃない。友達のプロローくらいしなさいよね。

「それじゃ、りんの思いが足りないってこ」

「シロップはそんなこと言ってるじゃないロブ!!」

び、びっくりした！ なによ、大声出して。メルポまでひっくり返っちゃってるじゃない。

「りんが作ったものなら、思いがこもってないはずなんてないロブ」

ぼそってひとこと言って、そのまんま、シロップは黙っちゃったわ。

ふーん。

その場に座ったあたしは、メルポをひざの上に乗せてあげた。さっき逆立った羽毛がそのままになって、足元は暑いくらい。

アクセサリをメルポからもらって、りんのポケットにしまってあげながら、あたしは考え続けてた。アクセサリでさえダメなら、なにか代わりにならない

かしら？

思いの強いもの。思い　ん？ 思い!?

「シロップ、思いの強い場所なら行けるのよね？」

「　何が言いたいロブ」

すっごく機嫌わるそうな声で、思わず吹き出しちゃいそう。がまんがまん。

「りんの今の思いを、直接感じてもらうのよ。今のりんなら、アクセサリ届けることで頭がいつぱいのはずでしょ？」

そう言いながら、あたしはりんの頭の近くにメルポを差し出した。

ふかふかの羽毛の上に降りたメルポが、りんの頭に近づいて　ひと声。いつもは意味がわからないけど、今だけはわかるわね。ほら、シロップ！

「　メルポ、たのむロブ」

ああ、疲れたあ。

結局、アクセサリ作るのギリギリになっちゃったし、またナッツハウスでパテちゃうなんて、あたしも成長ないなあ。

(メルボ、たのむ)

え？ いまなんか聞こえた気がするけど 気のせいかな。

気のせい、か。 やっぱ、疲れてるなあ。 でも、疲れるだけのものになったかな、アクセサリ？ あの人、喜んでくれるといいんだけどな

「メルー！」

ん？ なんか来た ああ、メルボかあ。 いつもシロップといっしょだから、ひとりでいるとこ見るの珍しいな。

あれ？ あたしに近づいてくる。 用かな？

「なにやってんの、メルボ？」

あたしのどこに来たメルボを抱き上げようとして、足もと見たら ありゃ。 ナッツハウスって、いつの間にかふかじゅうたんにしたんだろ。 この暑いのに、暑さが倍増してるよね。

ああ、なんだかどうとも暑い。 涼しいところでも行きたいなあ

(メルボが光ったわ！)

ん？ なに、くるみの声？

ちよっとくるみい、電気代くらいケチらないで、エアコンつけようよあゝ

「メルボが光ったわ！」

背中から声が聞こえてくると同時に、目の前に光が見えた。 よおし、あそこに向かっただけ

せえ、のっ!!

バサッ!!

思いつき羽ばたいた瞬間、目の前の世界が変わる。これでもう、場所なんて関係ないぞ。さすがメルポだ。ま、くるみもちよつとは役に立ってるけどな。

おっと、もうすぐ先に別の場所が見えるぞ。いきなり家の前に出るわけにもいかないし、いちど上昇しなきゃな。よし、出るぞお。それっ!!

白、しろ、シロ

とにかく、白ってことばしか浮かんでこない。そのくらい、白。

「なにロプーッツ!!?」

足もとの羽毛が、また思いつきり逆立った。そのとたん、あたしは我にかえったわ。

「さ、寒いミルーツ!!」

あたしの体の毛も逆立って　あ、あれ？ 変身が解けてる!!

「くるみ！ なにやってるロプー！」

「あ、あたしのせいじゃないミル！ なにかの間違いミル!!」

ああ、いままで着てた洋服が散らばってるわ。とりあえず、りんにかぶせてあっためなくちゃ！

「なんでもいいから、他の場所行くロプーッツ!!」

他の場所って　ああ、もう！

「メルポ、お願いミル!!」

あたしはメルポに抱きついて、じっと考えた。どこでもいいから暖かいと、「暖かいと」「ああ、こんなとき、ココさまたちがいてくださったら

「よし、また光ったロプー！ 脱出ロプーッツ!!」

「ありがとうございます」

扉についでるベルの音を響かせながら、女の子たちがナッツハウスを出て行く。

「ばたん、という音と共に扉が閉まるのを確認して、俺とココは同時に息を吐いた。」

「お疲れ、ナッツ」

「ここにこ笑いながら話しかけてくるココを見てみると、自然とため息が出てくる。たしかに、疲れた。」

「帰ってきたら、注意してやらないといけないな」

目をつむり、こめかみを軽く押す。そうしていると、いい香りがやってきた。薄目を開けてみれば、目の前にはカップが二つ。ココの気の配り方はあいかわらずだ。

軽く息を吐いてまた目をつむり、紅茶をあおる俺に、苦笑いの声が聞こえてきた。

「まあそう言うなよ。シロップだって悪気があってやったわけじゃないし、止められなかった僕たちにも責任はあるからね」

俺は目をつむったまま、カップを置いた。

「そうだな。りんのアクセサリーをちゃんと届けてきたら、飴をやって頭でもなでてやるうか」

言いながら、脳裏にりんの顔が浮かんだ。よほど疲れていたようだし、荒い飛び方して寝苦しくなければいいんだが。まあ、その点は問題ないか。くるみがついていることだしな。

「ナッツ。ちょっとキツくないか？シロップはそうう人に迷惑かけるようなやつじゃ」

「だっばーんっつ!!!」

「きゃあーっつ!!!」

な、なんだ？大きな水音に、女の子の悲鳴!?

「外だ！湖でなにか あ」

扉を開けたまま、ココの動きが止まった。

嫌な予感がする。俺はココの背中越しに外の様子を見て。思わずため息をついた。予感、的中だ。

「大丈夫ですか？」

できるだけ心配そうな声を作って、俺は呆然^{ぼうぜん}としている女の子に声をかけた。

頭から足元まで、まるごとびしょ濡れの女の子。

いや、濡れているのはその子だけじゃない。湖からここまで、一面がびしょ濡れだ。

「やだもあ、ぐしよぐしよあ」

女の子から出た声は、まだ呆^{ぼう}けている。俺は素早く彼女の後ろに回り込んで、ナツツハウスの方に引き寄せた。

「とりあえず、お店にどうぞ。女の子用の服がありますから、乾くまで着ていてください。ココ、着替えのできる場所に連れて行ってくれ」

扉の前にいたココに女の子を任せて、俺は後ろを向いた。

騒ぎの元凶は、真っ直ぐ空に飛んでいく途中だ。

「ココ」

女の子をつれて中へ入ろうとしているココを背中

越しに見ながら、俺は言った。

「『そうそう人に迷惑かけるよつなやつじゃ』の、続きは？」

大きくて深いため息。答えはそれで十分だった。

「こじゅうよんミル」

思わずこぼれた自分の声ではつとした。見えているのは足元の、ふわふわした羽根。じつと見つめてたらいつの間にか、頭のすみっこで羽根の本数がぞえてたんだわ。

どうしよう

「ん」

となりで、ちよつと息がする。ああ、いけない。りんに洋服かけっぱなし。

洋服ぜんぶ抱えてはがして、脇に寄せて。その途

中でまた、口からこぼれた

「ろくじゅーさん ミル」

さつきちよつとだけ見えた、ナッツさまの顔、すこく怒ってたわ 思わず、顔ひっこめちゃうくらいに。

「 ロブ? 」

「ココさまも、すっこく困った顔してた

「おいロブ」

どうしよう ふたりの顔が、頭から離れないわ。

あたしが、ココさまたちのもとに行きたいなんて思ったから、あたしの、あたしのせいで

「ったく ロブッ! 」

うわああ!

な、なに、いきなり体が壁におしつけられて

って、これ、急上昇! ?

「なにするミル! ちよ、ちよつとやめてミルツ!! 」

ナッツハウスから飛び上がったときだって、こんな急にながらなかつたのに。ああもあ、りんが起き

ちやうじゃないの!!

あ、あああ、水平に戻ったわ。

まったくシロップ、なにやってるのよ!!

「顔は上向いたロブ? 」

え??

正面にシロップの大きな横顔。そこから、目だけがちよこつとこつち向いてる。

「下を向くなロブ」

言われてはつとした。あたしの顔、また下がってきてる。 だけど、しょうがないじゃない。あんなことしちやつたんだもの。

「はあ

」

思わずため息つい たと思つたら、ちがった。シ

ロップのため息が、風と一緒にあたしの脇を通って

いって、

「ミルクは顔上げて、ふんぞり返ってるのがお似合

いロブ」

な、なんですってえ!?

「シロップ、あんたねえ！」

平べったい顔を正面から見て、あたしがどなるうと息吸った瞬間、目の前の顔が変わった。

目が、ニヤニヤしてる？

「ミルクは落ち込んでたって、ちゃんとお世話ができてるロプ。なら普段ぶんぞり返ってても、シロップは何とも思わないロプ」

え？

そう言われて、気づいた。あたしの左手、勝手にりんの頭を扇いでる

「お、お世辞言ったって、何も出ないミルク！」

なんなのよ、もう。思わず、目をそらしちゃったじゃないの！

「そうそう、それでいいロプ。」

シロップはココでものぞみでもないロプ。ミルクなぐさめるなんて、まっぴらロプ。それに

それに？

「ココたちに見つかったのは、シロップロプ。シロップが勝手に飛んでって、勝手に湖落ちかけて、勝手に逃げてったロプ。ミルクもりんも、なーんにも関係ないロプ」

な！? なに言い出すのよ、こいつは！

「勝手なこと言ってるんじゃないミルク！ そんなのだから、王国ではココさまにしかわかってもらえなかったミルク！」

あたしは、いつの間にか立ち上がって叫んでた。ココさまの努力を、なんだと思ってるのよ、こいつはっ!!

「わかってくれるヤツなら、ココの他にも増えたロプ」

なのに、シロップはどなり返してこなかった。静かな声で、まっすぐあたしを

「シロップの仕事は運び屋ロプ。ちゃんと運んだあどだったら、どんなに怒られても平気ロプ」

いいえ、あたしと、寝てるりんを見つめてる、か。はあ。

「しよ、しよがないミル。だつたらあたしたちだけで、もう一度やってみるミル えいっ！」

ぼんっ、っていう軽いいつもの音といっしょに、あたしの体が大きくなった。服はさっき脱げちゃったから昔のだけど、ま、非常時なものね。

さて、地図は と。ああ、服の間にあつたわ。変身が解けたとき、一緒に飛ばしちゃったのね。

それじゃ、頭痛くなるかもしれないけど、覚悟して地図とにらめっこしま

「あら？」

地図の間からなにかはみ出てきてる。なにか白いものが。

「どうしたロブ？」

シロップが声だけで訊いてきた。もうこっちを向かないで、まっすぐ飛びながら。

「なにかあるのよ、地図の中に。さつきはこんななかったのに 奥にはさまってたのかしら？」

ばさっ、て大きな羽ばたきの音と一緒に、少しだ

け体が浮いた。

「りんだつてバカじゃないロブ。倒れることも考え目印つけてくれたロブ。ほら、早く見るロブ！」

はいはい。言われなくてもわかっているわよ。もっ。

「ええと、なにかの領収書みたいね。今日の日付で ええ？ ええっつ！？」

うそ

「ど、どうしたロブ？ なんなのロブ!？」

大きな顔が近づいてきた感じ。たけど、あたしはまた顔上げられなくなっちゃった。

だつてこれ、これってことは

「り、り ん、の、おバカあゝっつ!!!」

「やれやれ」

びしよ濡れの女の子は、くるみの服に着替えたら

すぐに出て行った。どうやら、この湖が嫌いになっ
たらしい。

「お客が一人減った、か」

店の前、湖に下りる階段に腰掛けて、しばらく眺
めていると、背後に気配がした。

「休みにする気かい、ナッツ店長？」

ココに声をかけられても、振り向く気がしない。俺
は真直ぐ空を見上げながら、

「怒るな、って言うつもりなら無駄だ。運び屋のプ
ライドだけは、昔から俺も認めてたんだからな」

目の前に、飛んでいったシロップの姿がよみがえ
る。水をはじき飛ばす悪戯した後、急いで逃げてい
く姿が。

「ナッツ、真面目な顔でりんをくわえたシロップ見
ただろう？ りんは寝てるんだし、なにかトラブル
でも」

「メルポがいる。りんのアクセサリなら、相手のと
ころまですぐにも行けるはずだ」

そうだ。りんのアクセサリに思いがこもっていな
い訳がない。そんなものを運ぶ途中で遊ぶとは
「そうだね。ただし 人に送るためのアクセサリ
ならね」

ん？

ココの声の調子が変わった。いつもの明るい口調
から、ささやくような声に。

思わず振り返った先に、白いメモを持ったココが
笑いながらしゃがんでいる。

「いま電話があつてね、りに伝言を頼まれたんだ。
読んでみるかい？」

笑つてるといふより、ニヤニヤしてるな そう
思いながら、俺は受け取ったメモを見た。

「届け物は無事到着しました。バイク便フコモリ
バイク便!」

はっ、と振り返って見上げた空に、またシロップ
の幻が浮かんだ。さつきとは違う、よたよた、ふら
ふら飛ぶ姿で。

メルポには頼れない、りんも寝たまま、それで墜落寸前、か。

「思わず睨んでしまった 悪いことをしたな」

「帰ってきたら、一緒に声でもかけてやるう。なあに、一声かけりゃわかってくれるさ。シロップなら」

ぼん、と叩かれた肩からちからをもらって、俺は立ち上がった。

「お前らしいな 助かる」

ココも隣で立ち上がって、軽く伸びをしたと思ったら、俺の方に向き直った。

「それじゃあ、一旦店を準備中にしてくれないか？ 僕はメガホン持って待ってるから」

ん？メガホンだって？

眉間にしわ寄せた俺の顔を見て、ココがまた笑った。さっきと同じ、ニヤニヤした笑いだ。

「シロップのことは、ずいぶんわかってきたからね まあ見てろよ。配達がなくて、りんがまた寝てるとしたら、多分」

「ナッツハウスが見えてきたロフ」

オレがそつ言つと、背中からため息が聞こえてきた。

「気にするなって言ったロフ？ 全部シロップがやったことロフ」

また、ため息。やれやれ。

「そうだとってもよ。怒ってる」ココさまたちに会うのは、やっぱり気が重いわ」

そのあとで、ちっちゃくぶつぶつ言ってるな。『シロップのせいにする気なんてない』とか、全部聞こえてるぞ。 まあ、聞いてないぶりくらいにしてやるけどさ。

さて、もうちょっとで湖、と

「シロップ！」

ナッツの声で、思わずオレの体が下を向いた。覚悟はしてたけど、やっぱりビクとするな ん？ 声のする方に、いつもと違うものが見えた。いや、

いつもの二人なんだけど

「あ、そうか」

口元が笑いそうになったんで、オレは何度か頭を振った。

それじゃ、いづくぞあつー！

「ほら、なにやってるのよ。ナッツさまが呼んでるわ。行くならさっさと うわわっ!」

真下に大きな湖。水面がぐんぐん近づいてくる。

「ちよ、ちよっとなにするのよシロップ！ お、おち落ちちゃ ー!!」

あとちよっとで水面、っていうところまで、オレは羽根を思いつきりはばたかせた。

そのまま、ゆっくり、ゆっくり、と よし！

ちよぱんっ！

「え？ ちよっとシロップ、ナッツハウスはもつと先よ。湖に降りてどっすんのよ!」

羽根をとじて、顔を真っ直ぐ上げて よし。

「ちよ、ちよっとちよっとちよっと！ なによシロップ、これじゃまるで」

オレはその声無視して、動き出した。

両足を大きく動かすと、体が前に動く。すーっと、音もしないで。

頭の上はキラキラの太陽。だけど動くたび、胸や腹は涼しくて気持ちいい。

ああ。やっぱり、夏は水鳥に限るよなあ

「早くお店に行きなさいよ、シロップってば！ こんなにふざけたら、ココさまたちにもつと怒られちゃうわ!!」

くるみがドンドン背中叩いてる。無視しようかとも思っただけぞ まあ、見せてやるか。

片羽根で、背中の中を少しめくってやると、背中が痛くなくなった。

「な、なによ、あれ」

オレは片足だけゆっくり動かして、からだをナッツハウスの方に向けた。その手前、湖のほとりに派

手な色が二つ並んでる。

赤と黄色のメガホン持って、笑いながらこつちに手を振ってるココと、ナッツ。

「だから言ったロブ？ わかってくれるヤツなら、増えるロブ」

横目でちらつと見てみると、くるみのヤツ、あきれ顔から笑顔になって、かこの端に腰掛けて、手まです振り出した。

岸の二人がメガホン構えて、息を吸ってるのが見える。よしよし、そろそろだな。それじゃ、ゆっくり近づくとするか。ゆっくり、ゆっくり、なるべくらしい姿で、と。

さあ来い、突っ込み！

「そんな顔のボートなんて、あるかーっ!!」

—おしまい—